# 翻刻 近衛信尋自筆『新一人三臣和歌』

大谷俊太

陽明文庫所蔵、編者である近衛信尋（慶長四1599年～慶安二1649年、五十一歳）自筆の『新一人三臣和歌』を翻刻する。本書については、拙稿「『新一人三臣和歌』攷」（『中世近世和歌文芸論集』日下幸男編、思文閣出版、二〇〇八年）に於て、諸本・編者・成立事情等を論じた。陽明文庫には歌数が少ない筆写未詳の別の一写本（近244/387）も伝わるが、本稿は編者自筆本の翻刻である。詳しくは上記拙稿に譲り、ここでは当該本の書誌的事項を再掲する。

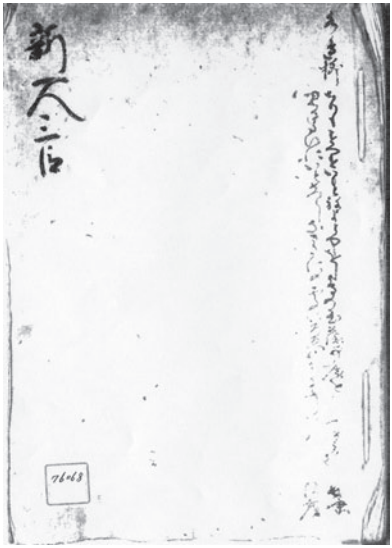
写本一冊（一般文書76078、目録掲載署名は〔和歌〕）。縦二三・二、横一五・二糎。外題「新一人三臣」（左肩・墨書・打付書・本文と同筆）。内題なし。本文共紙表紙。袋綴の仮綴。料紙は楮紙。墨付、三十九丁。遊紙、中に一丁、後に五丁。半丁に十一～十五行書き。題・歌・作者を同一行に記す。歌数は計七百二十首（うち漢詩三首、俳諧二句。また、和歌のうち十首は重出、二首は古歌）。宮内庁書陵部所蔵御所本『新一人三臣和歌』（501/807）は当該本からの転写本と考えられる。

本書は、信尋三十二歳の寛永七1630年から、没する前年の慶安元1648年に至るまでの、信尋の和歌の師である後水尾院・三条西実条・烏丸光広・中院通村四人の、宮廷等での歌会歌を中心に集められたものであるが、それ以外にも、

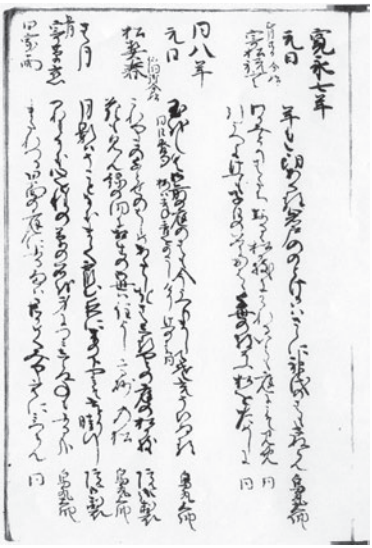
光広の東海道の道中詠や有馬にての狂歌、寛永十二年に通村が関東に長逗留した際に後水尾院と交わされた和歌や、将軍家光の和歌、松花堂昭乗と通村との贈答歌、板倉周防守・永井信濃守拝領の歌、江戸城東照宮造営の際の光広詠、沢庵の家光への和歌、長嘯子の歌なども記録されている。即ち、本書は、信尋と後水尾院の間で話題になった和歌の書き留めであり、当代宮廷歌壇の関心の在り処を示して興味深い。

（凡例）

一、翻字は原則として原本表記の通りとする。
一、旧字体・異体字・合字は通行の字体に改めた。
一、句読点・並列点を施し、清濁を分かった。
一、挿入語句は本文に組み込んだ。
一、小字・割注部分は〈　〉で括り示した。
一、その他、私の注記事項は（　）で示した。

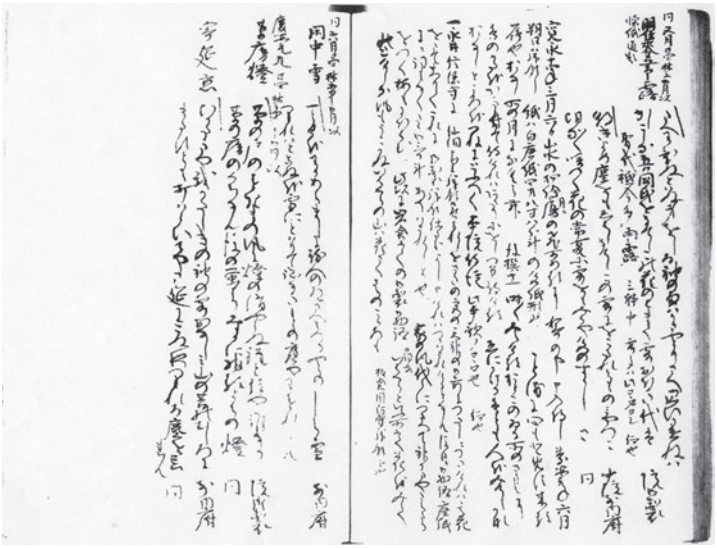


表紙



2丁表

9丁裏・10丁表



38丁裏・39丁表（本文後尾）

【　翻刻　】

（外題）「新一人三臣」（左肩、打付書、墨書）

（表紙右端に書入あり）「水辺柳　ちりもすへずいもとねよとやをし鳥の玉藻の床をはらふ青柳　長嘯
見るたびにいとめづらしなさゝがにの雲のいろゑのかはるふじのね　沢庵」

元和九年正月十九日御会始　　御製

1　柳弁春　春はたゞ柳にしるし緑なるひとつ草木のあるが中にも

2　女郎花　露にふし風になびきて女郎花身を心にもせぬすがた哉　中院大納言
むかしよまれし哥也。長嘯褒美のよし、為景物語也。

3　　鶯の声のしるべに春も今たちかへるらん難波津の道　烏丸大納言

4　　よろづ代もさしてやことに鶯のみかさの山の春をつぐらん

5　　つらさこそ色もかはらめ白玉とみえしはいつの涙なるらん　院御製

寛永廿年（ママ）月十六日、竹門辞世

6　　なに事かこれなんそれとわかつべき枕のうへの夢の世中　龍華院

寛永七年

7　元日　年も今朝あくる岩戸ののどけさはさらに神代の春もきぬらん　烏丸大納言

正月廿日会始

8　寄松祝言　わかみどり春たちなるゝ松が枝にかゝれるいとも庭にこそ見め　同

9　引うへよけふも子日の名におはゞ千世の数そふ松をためしに　同

同八年

10　元日　玉をしく御前の庭の春も今うつりましてぞ光そひぬる　烏丸大納言

11　同日発句　梅は去年香をのこしけりけふの春　同

仙洞御会始

12　松契春　これやこの千とせのはじめあたらしき春しるやどの庭の松が枝　院御製

13　花も見ん緑の洞に相生の御世は住よし高砂の松　烏丸大納言

14　春月　月影はそことなきまで霞む夜に木の下やみぞひとり晴行　院御製

五月

15　寄草恋　つれもなき心を種の草の名を身につみしらぬ年もふる哉　烏丸大納言

16　田家雨　またれつる田面の庭にふる雨は君がめぐみや空にみつらん　同

正廿日会始

17　柳先花緑　／花をいとによりあはせてもやどにみんまづ春めける青柳の枝　烏丸大納言

18　花よりも春の色とや青柳のひがしの岸に先なびくらん　同

烏丸大納言家にゆきて、庭のいと桜みし時、人々よみし中に

19　いとざくら花にひかれし車こそ思ひもかけぬ蓬生のやど　同
20　ふりはへて色そふ雨のいとざくらみてあかさずは春の錦を　同
21　兼惜春　花は根に鳥は入なん雲路ぞと思ひをきてもいかさまにせん　同
22　水郷冬月　山風に川浪たかく声ふけてよし野の里と月のさやけさ　同

七月

23　早春風　朝あけの雲も霞もときつ風打なびく世の春はきにけり　同
24　里歎冬　いはぬ色の忍ぶの里の花よなど思ひみだれし山吹の露　同
25　堤霧　たがために人めつゝみのへだてとて立かくすらん秋の川霧　院御製
26　夕顔露　咲ぬ也露のまぎれのたそかれにわれそのそこの花の夕顔　烏丸大納言
27　川筏　明暮にかよふいかだは杣川やこほらぬ浪の跡をみすらん　同

十一月

28　惜別恋　明る夜の程なき袖(ソデ)の涙にや猶(も)かきくらす衣々の空　院御製
29　採早苗　かげひたす田面の水のにごらずは雲にはうへぬ早苗ともみし　烏丸大納言
30　杣紅葉　斧柄は紅葉にくたせ杣山の真木も檜原もかたはらにして　同

十二月廿五禁御月次

31　薄未出穂　／所せき草のたもとに露ぞをくますほの薄穂にいでぬまは　同
32　穂にいでば猶もあはれはそひてまし秋しりそむる露の小薄　同
33　寄遊女恋　／河竹のながれをあだの一夜ともいひはおとさじ人のつれなき　同

34　袖の浪かけんもねたし我方はあさつま舩もよるべやはなき　同

寛永九年

正月廿日仙洞御会始　詩ノ御会始

35　梅柳争春　播(ホドコス)レ物天公非レ有レ私　争レ春梅柳捻相宜　院御製
只如三偏妬二東君(ノ)寵一　粉白梢(キト)兼黛緑枝(ルト)

同日仙洞御会始

36　霞添山気色　みずやけさ遠山ざくらおもかげにかすみそめたる嶺の白雲　烏丸大納言

37　雪ながらさらに霞の立そふや白を後の山姫のそで　同

38　早苗　つくば山しげきめぐみの下水も又せき分てさなへとる比　同

39　国ぶりやわきて早苗をうへてましおさまれる世の同じこゑより　同

六月

40　峯照射　明る夜を残すかげとや木がくれのしげき尾上にともしさすらし　院御製

41　〃さ男鹿のたつたのおくも残らぬや嶺にも尾にもともしするころ　同

42　夏月　袖おほみすゞみがてらの道のべに月かげあかず立ぞやすらふ　烏丸大納言

43　擣衣　ながき夜のあかつきかけてから衣うちいづる色や霜をかさぬる　同

44　早苗　おりたちていそぐ中にも一村はとらでおくての早苗分らん　中院大納言

宇津山にて

45　秋に猶心ぞうつる宇津の山まだつたの葉は露もそめねど　烏丸大納言

清見にて

46　影とめぬ月にとはゞや清見がた音のみ浪の関はもるやと　同

富士山はじめてみるやうにおどろかれて

47　年へてもわすれぬ山の面影を更に忘て向ふふじかな　同

48　筏　心あれやきし行水をせきとめて紅葉々ながらたゝむ筏士　院御製

49　初鴈　古郷の秋にたへずや鴈がねのこゝろかろくもいでゝきぬらん　同

50　秋風を都の空のしほりにて雲路たどらぬ鴈やきぬらん　同

51　待月　あかなくもまだきといひし山の端にまたるゝ月はおもふかひなし　中院大納言

52　待いでん影も程なし山の端の光くはゝる秋の夜の月　同

寛永十年

53　元日　分行も雪はまよはじ東方けふこし春の道をしるべに　烏丸大納言

正十二日仙洞御会始

54　寄若菜祝言　わかなつむ袖のよそめも白妙の鶴の毛ごろも千代はみえけり　院御製

55　同　春はまづみやこの野べの七種の八千代をのみや君ぞつむべき　中院大納言

正廿五聖廟御法楽

56　誓恋　／よしやその千々のやしろはかけずともたのまれぬべき色しみえなば　院御製

57　たのまれん心は色にみえぬべしちかふによらぬ契りとをしれ
58　たのまじよことの葉ごとのちかひにぞ中々しるき人のいつはり
59　神楽　神代まで思ひやられておもしろくうたふ声よりあくるあまの戸　中院大納言
60　馴恋　いひそめて後は中々あさゆふにつらさみするもうきこゝろかな　同
61　暁　なくとりにさそはれそめし手枕の夢をのこさぬ鐘のをとかな　通純
三月御法楽　烏丸も中院も端之由被申候。
62　山中瀧　／岩波を梢にかけて松風もさらに音なき山の瀧つ瀬　院御製
63　水上は梢の露やちりひちのつもりてたかき山の瀧つ瀬
右ノのトやト烏丸大納言添削。此外三首御余分アリ。失念。
64　祈身恋　うきにたへあらばあふよをたのみつゝ身のながらへや神にいのらん　烏丸大納言
65　旅泊夢　ゆめにさへいさしら浪の浦づたひ過行方はとをざかりつゝ　同
七夕仙洞七色ノ御遊之中ノ御会
66　憶牛女言志　天川絶ぬ契りになぐさめて入ぬるいそのうらみもぞなき　院御製
を思ふには
67　天川絶せぬ世々になぐさめんさしも入ぬる礒のうらみも
68　こよひあふ二の星のやどりとる雲にくらぶの山をかさなん
69　あらためぬちぎりやつらき織女のたはぶれにくき中の恨を
七月
70　橋雨　うちしめる雨さへおもくをふ柴にかはらぬ橋やふむもあやうき　院御製
をはしにもわたすみち　此分中院大納言添削
71　／行人の跡絶はてゝ板はしの霜にまされる雨のさびしさ
よりけなる　烏丸大納言添削

72　真木板も苔むしはてゝ村雨のかゝれる橋の声をだにせぬ

八月禁中御月次

73 萩映水　おらでのみよしみん萩の枝ながらうつろふ水は露ぞをきそふ　烏丸大納言

74 寄秋枕恋　うしや今たが手枕にいとふらん身はならはしの閨の秋風　院御製

75　つゆけさもことはり過て　夜はの秋の枕ぞうく斗なる

九月九日於国母当座

76 早秋風　ふくもたゞ今朝より秋の宮のうちは猶世にしらじ荻の上風　烏丸大納言

同十七日禁中御月次当座

77 河初秋　竜田川まだ初秋に面影はちらぬ紅葉の水くゝるなり　同

同廿五日仙洞聖廟御法楽

78 卯花似月　白妙の月のかつらの種とりて卯花垣はうへしとぞみる　同

79　暮ぬとてかへる山べの卯花は月よりさきの道しるべせぬ　同

同前

80 野女郎花　冷じき野べの旅ねもむつまれて名にのみかこつ女郎花哉　同

同前

81 曳菖蒲　露ながら汀のあやめ引袖にはやがてさ月の玉をかけゝる　中院大納言

82　池水のふかきこゝろもあやめ草けふながき根を引てにぞみる　同

同前

83 鈴虫　こゑのあやを花の錦にをりはへて秋しりがほに鈴虫ぞなく　同

同前

84 若木桜　いかに又色かそはまし宿の梅生行末もながき立枝に　院御製

85 秋祝言　をきそふる芝の砌の秋の露君がかさねん千世の数かも　中院大納言

86　よとゝもに影もくもらじ君がみむ行末とをき秋の夜の月

87 冬浦　／時雨こしこの夕浪にこと浦の雪をよせたる舩もこそあれ　院御製

烏丸大納言中院大納言、右之御製合点

88　焼そへてさすが三冬のうら風もふせぐたよりや海士のもしほ火

89　ふけわたる浦風きよく月さえてまさごにきゆる霜の白鷺

十二月廿五日聖廟御法楽

90 若菜　つかへきて君がためとやくるすのゝ千世のわかなもつみはそへてん　烏丸大納言

91　つみかへてよし七種もかぞへみん小沢のこほり野べの雪まに

92 顕恋　くやしくもつゝむにいとゞあらはれて思ふあまりの色に出ぬる　同

93　夢にのみこゆとおもひし相坂の清水にあやなかげをもらしつ

十二月廿五日御法楽

94 河紅葉　楓樹秋深錦満枝　風前雨堕染漣漪

臨河只恨東流水　不為霜紅住少時　院御製

95 浦春月　かすむともわかずやいかに春の月けぶりになるゝ浦のみるめは　同

中院大納言は煙とばかりは如何のよし被申上。烏丸大納言はけぶりと斗もくるしかるまじきと也。猶

焼物ありても可然やらんと被申し也。

寛永十一年

正月十七日禁中御会始

96 水石歴幾年　春いく世岩をつゝめるしらぎぬに霞たちそふ布引の瀧　烏丸大納言

97 万代もとみの小川の契りをや亀ゐの水の春にむすばん

同廿日会始

98 竹為師　春になびく雪さへとけしくれ竹やすぐなる庭のをしへともみん　同

99 葉かへせぬ竹にならへと此殿に千代をつげくる春風ぞふく

二月十二日仙洞御会始

100 逐年花珎　見るたびにみし物（色香と）としもおもほえで花（年ふる春も花にふりせぬ）にふりせぬ世々の春哉　院御製

中院・三条合点

101 ／春をへてなるゝにいとゞそめまさる心や花の色にいづらん

102 春毎の花やいかなるこぞみしも又光そふ心ちのみして

103 同　万代のたねをやふくむ年毎に砌の花のいやさかへ行　三条前内大臣

104 同　君がためつきせぬ春をいやとしに色そめましてにほふ花哉　中院大納言

有馬にて

105 遠山見花　／今朝たちしところさだめぬ山の端の雲のおくなる雲ぞ花なる　烏丸大納言

106 あし引の遠山かづらほの〴〵と花の光に明はなれ行

梅花を折て送ける人に申つかはしける

107　わが袖のありかたづねて鶯のおられぬ声もにほふ梅が枝　同

108　湯に入て　誰とても心のくせはありま山からき出湯のしるしみせなん　同

焼亡につけて、狂哥

109　有馬山いなひる中の焼亡に煙はたちぬやどのなきまで　同

三月尽

110　牡丹　今年さて十とて三の紅の花にくはゝる日数とおもはゞ　同

五月十一日於内大臣殿

111　夏月　をしひらく真木の戸口のとばかりにさし入月のよひのすゞしさ　同

112　八月十五夜　名をうるは月さへかたき浮世ぞとことはり見せてかゝるあま雲　同

113　九月十三夜　くもりしは秋のもなかのあやまりをあらためていづる長月の空　同

霜月十七日禁中御月次

114　落花　散はてし後は梢に吹たえて嵐をうづむ花のしら雪　同

115　山ざくらちりかふ時は半天にたゆむもおしき花の夕風

寛永十二年

116　元日　ゆたかなる年をむかへてみやこ人花にあらます家ごとの春　烏丸大納言

正十七日禁中御会始

117 鶴宿松樹　／わか緑松に羽ぶきてやどるもや千とせくらべのひなづるのこゑ　同

118 白雲にたちまふつるも十かへりの花のやどゝや松をはなれぬ　同

同十九日仙洞御会始

三条西烏丸中院合点。三条烏丸両人、端二首御談合

119 陽春布徳　／やど毎に咲梅がゝも隣ある春の心を／先(世に)しらすらん　御製

120 世を花にもよほしたつる風雨もさらに時ある春ののどけさ

121 くまもなき人のめぐみを鳥すらも百よろこびの春やつぐらん

122 世は更におさまる春ぞ下(や)にある司はなるゝきゞすをもみよ(む)　曽恭ガ故事也。

123 世は春の雨にまさりて草も木もうるふめぐみの露やあまねき

124 同　／しるや世に柳桜をつくしてもみその〻春を民とたのしむ　烏丸大納言

125 わが君の春の心を心にて草木にもれぬめぐみをぞ思ふ

同廿日会始

126 梅花久薫　みすのうちに吹まがひぬる春風や行末とをきやどの梅がゝ　同

127 日をふるに春はしるしなやどの梅にほはぬ花の枝に残して

七月廿四日禁中御月次当座

128 暁虫　影うつる露を霜なる浅茅生に虫の音きほふ有明の月　同

129 心すむ暁露のふりはへてあはれいまめくすゞむし(むしのこゑ)哉

130 八月十五夜　名はそれと月の御舟のかたほにも雲の浪路に影をみせける　同

中院大納言、子細ありて関東へくだられしに、久しく逗留ありけるころ、院よりつかはされける

131　あさましく月日へにけりひとかたにみざるはおほき秋にやはあらぬ　院御製

132　秋風に袂の露もふるさとを忍ぶもぢずりみだれてやおもふ

133　いかに又秋の夕をながむらんうきは数そふたびのやどりに

134　みる人の心の秋に武蔵野もおばすて山の月やすむらん

135　何事もみなよくなりぬとばかりを此秋風にはやもつげこせ

此後武家気色よろしく成て対面ありしよし注進の使に文のはしに書付られける

136　春ならぬこのめもうるふ武蔵野の末までかゝる露のめぐみに　中院大納言

137　旅衣立かへるべき袖のうへにひとつ涙のけふはうれしき　同

これよりさきに聖護院上洛の折ふし

138　君ぞ猶けふはをくれてなくたづの雲ゐにかへるしるべとをなれ　同

139　写絵花　ありとてもあるにさだめぬ世中のなきにもあらぬ花のうつし絵

140　昨日はけふの昔といふことを　うつり行世のありさまは目のまへの昨日はけふのむかしなりけり

右二首御所様尊詠と哉らん。左様に候哉。中〳〵大かたの御こと、はみ給候はず。さて、端の御詠、花の写絵を、色みえてにほひなければあるにもあらずなきにもあらず御覧じたてられ、それを世中にたとへ思召よせられたる御作意珎重申ばかり御座なく候。なきにしもあらぬ、御尤候歟。きのふは今日の御詠、殊にこしの御五文字つよくすはりかやうにおほせふせられ候事、成がたき御事に候。目の前と御ざ候。自知の御心より出申候。御心御詞、鳥の左右の翅のごとく相兼第一御風体など凡人のとかく申上がたき御事に候。心はあ

たらしく詞は幾度も古く、作意を簡要と昔より申ならはし候。今又同前に候。言語道断と申候はんもおろかに候歟。江大樹の御詠、烏丸大納言批判ト云々。人のみせしまゝ写留了。

寛永十二年

141 元日口号　いかで身のさとりひらくる花もみんまよはぬ年の春はきにけり　院御製

御詠草、歳末に拝見。仍こゝに書付了。

142 除夜　昔日空期茂実騰（クスノコトヲ）　不才多病百無能　行年四十明朝過　従レ此々身何足レ憑　同

寛永十三年

143 元日　人つどふ千引の石も世の声のおさまる春のためしとぞきく　烏丸大納言

144 同誹諧発句　みそむるはあづまかゞミノモチ牛哉　同

正月九日

145 霞添山気色　老の坂越ても遠し霞立藐姑射（ハコヤ）の山の春の行末　院御製

146 立ぬはぬ春の衣の色そへてはこやの山に霞たなびく

147 今よりは錦ぬものゝ山はあれど春の色とは霞をぞみん

148 よも山の松のけぶりも千世（や）こめて

149 朝日影にほふ霞

右両首、下失念。

東国の気色よろしくなりて後、八幡山に七日参籠ありし時、瀧本坊昭乗、

150　たのめたゞ人の人より我人のさかへを神もさぞ思ふらん、とよみてつかはしける
151　返し　頼むぞよおろかなるをも我人の数にもらさぬ神のちかひを　中院大納言
六月十七日禁中御月次
152　紅葉　露霜につれなくみえて立ならぶ松も紅葉の一しほの色　烏丸大納言
同
153　述懐　我とてもすなをなるべきそのかみをいかで心ははふらかしきぬ　同
七月廿二日仙洞御会
154　朝見草花　朝まだき露しらみ行庭の面にはへある秋の花の色〳〵　院御製
155　同　〳〵朝な〳〵籬の花にをく露も山路の菊のためしにぞみる　中院大納言
156　をきそはん露もいく世の秋のかず朝な〳〵の萩にみすらん
157　霧中初雁　立きりの中吹分て行風に初声わたす鴈の一つら　三条前内府
158　簷松　なれてだにしのばれまじきことの葉は松も軒端もくちて残れる　注有　同
右ノ詠草、折紙ニ右ノ題二ツ端ニナラベテ被書。次ニ和哥二行七字ニナラベ被書。なれてだにノ哥ノ下ニ細字ニ注有ト被書付。無余分。注有ノ子細相尋之処ニ、マヘ〳〵ヨリ如此ノ哥ニハ下ニ注有ト書也ト被申。
159　しのばれん物ともなしに小倉山軒端の松ぞ馴て久しき　定家卿ノ哥也。此心ニテヨミタルト也。
関東の気色よろしくなりて後、はじめてしかうの御会
160　春雨　霜がれの草葉もしるや君が代にあへるは春の雨のめぐみを　中院大納言
161　松間紅葉　をく霜の後をばいはじ紅葉〻にまづあらはるゝ松の色哉　同

七月廿二日仙洞御会御当座　御気六ヶ敷よしにて、後日被遊了。

162 早春鶯　〳〵梅がゝのしるべもまたでくる春にまづさそはるゝ宿の鶯　院御製

163 咲にほふ花もをそしと鶯の声にや春の色をそふらん

同御会

164 海辺月　わたの原雲ゐにつゞく夕浪のかぎりしられて出る月かげ　同

165 〳〵夕煙月に心して須磨の海人の家だにまれに藻塩たくらし

166 松残雪　春をあさみ消あへぬ雪も松の葉のならひつれなき名にやたつらん　中院大納言

167 とけ初て下よりおつる雫にもうへはつれなき松のしら雪

168 祈逢恋　あふ事のしるしありける神をこそ此行末もかけてちぎらめ　同

169 祈こしあふ夜かはらぬ行末を猶かけそへん神のしらゆふ

八月十七日禁裏御月次当座　　までとは左右の事也ト云々。

170 庭月　待となくとちかきまもりのまでながらたちてもいそげ山のはの月　三条前内府

九月六日仙洞御当座　二十首之和哥

171 野外草花　露分しむかしの人の袖の色もさがのゝ花に残す秋哉　中院大納言

172 野の露もひとつ物とは誰かみん秋は色〳〵の花にをくより

173 寄雨別恋　降雨の昨日なりせばさはるべき身のなぐさめもうき別かな　同

174 くれにともちぎらぬ袖にふり初て身をしる雨もきぬ〴〵の空

175 衣〳〵のはかなき夢の涙にやあしたの雨の袖ぬらすらん

176 海上暁月　〳〵み山にはかくろへはてん（ひ）〳〵明がたの浪にも残る、此分、中院大納言添削暁も猶末とをき奥の月かげ　院御製

177 いさり火もふけ行波に影きえて月のみ白き秋のうら風

178 閑居待友　〳〵とふ人は思ひ絶ても松の門さすがに三の径をのこして　同

179 すてし身の昔がたりの友ならで待こともなき宿のしづけさ

後日被改此両首御清書了。

180 海上暁月　入はつる都の山の月影も残るや奥の月のあけがた

181 閑居待友　今更にとふべき誰を松の門さすがに三のみちをのこして

九月六日家之月次ト云々

182 紅葉をはしに　枝ながら陰をひたして竜田川紅葉をはしにわたる秋風　三条前内府

183 よるはほたるの　まなばずも老もて行てよる〳〵は蛍のみこそ身をてらしけれ　同

九月十三日仙洞御会

184 池上月　月やしるこよひもこよひみる人を待えし宿の池のこゝろは　院御製

185 同　池水のもなかの秋のくもりしもこよひの月にそふ光かな　中院大納言

186 長月のみぎりの池にすむ鳥のをしむべき名も月にかくれず

187 愚詠、池水のもなかの秋のくもりにし月もこよひの光とぞみる　如此。依之、長月の哥清書了。

188 池上月　月こよひ十とて三のをのづからしらべもすめる秋の池水　烏丸大納言

189 秋はあれど月も三池の水の面に二たびすむやこよひなるらん

今日無出座。入夜如此詠草進上。御感之御気色也。

九月十六日仙院御当座卅首云々

190 草花露　きらめくは玉かなにぞと百草の色にとられぬ花の白露　院御製

191 旅行　ゆき〳〵て思へばかなし末とをくみえし高嶺やあとの白雲

192 初秋風　こゑよばふ緑の洞の松にきけ風も千とせの秋のはじめを　烏丸大納言

193 擣衣到暁　うつたへにあかつきしろしから衣つちの音には霜やをくらん

九月廿四日禁中御月次当座

194 さける藤なみ　／春の日のめぐみも北はあさからでこずゑあまたにさける藤なみ　三条前内府

195 山たかみ枝より落る瀧の色は岩ほをかけてさけるふぢなみ

196 なにかつねなる　／物ごとのなにかつねなる時のまにうつるおもひもこゝろとめては　烏丸大納言

197 さらばそのまことはいづらあだものゝ色香を置てなにかつねなる

198 さらぬ別の　吹のこす風の紅葉の色もあれなさらぬ別の秋のかたみに　中院大納言

後日に相尋候処如此。余分不聞之。

九月卅日仙院御当座

199 夏月易明　／夏の日をながめくらしてみずもあらずみもせぬ影やみじか夜の月　院御製

200 さし入ておくも残らぬ真木の戸のあくる夜しるき月のみじかさ

201 湖上月　／はれてよき同じたぐひの秋の月たが面影ににほの海づら　同

202 しほならぬ海にぞからんけぶりさへ空にくもらぬ月のみるめは

203 立春風　／年緒のながきを君が代の春にあくる岩戸の風ものどけし　三条前内府

204　はらへども四方に霞のはれやらで風の色にも春をしるらん

205　依雪待人　／心ありてふりつがぬまの初雪にあとつけてとふ人ぞまたるゝ　同

206　とはるべき折さへ過る雪の中にかならずと待我ぞつれなき

207　名所鶯　／鶯も今は春べと難波津や冬ごもりせぬ花になく也　中院大納言

208　とぶ火のゝ野守またじ鶯のなくや梅が枝花のしるべは

209　霧染紅葉　／又／や見ん時雨つくして行秋／もけふばかりなるみねの紅葉ゞ　同

210　染てけり時雨にまじる日影さへはれて色こき峯の紅葉ゞ

十月十七禁御月次当座

211　鷹狩　／とりちらす雉の尾花は過てこし秋のかり場の色も残れり　烏丸大納言

212　おち草をしるべに行はたつ鳥をやりすごさじの鷹のふるまひ

213　納涼　すゞしさをあかずも袖につゝまめや松風ながらむすぶま清水　同

214　あつき日をよそになしつゝふりいでん雨をふくめるうき雲の空

同廿六日　同

215　帰鴈　行鴈のかすめる空は墨がきの跡にもにたる春の明ぼの　三条前内府

216　氷　流れくる水のよどみの色よりや氷もあつき淵となるらん　同

217　祝　民の草心のまゝにかりとりてかまどにぎはふ時にあふらん　同

同

218　五月雨　明暮のさだかならねば天の戸のいくかをわかぬ五月雨の雲　烏丸大納言

219 行末は海につゞきて山川の淵瀬をうづむ五月雨の比

220 月　久かたの空にすむとも須磨あかし月は此世を光とぞ思ふ　同

221 人わかぬ影こそ月はあはれなれ草かるおのこ海人の袖にも

222 述懐　あらためて昨日難波のあしからば今日よししらん身にもあらばや　同

223 大かたのさだめある世の齢にはをろかなる身のなにをなさまし

同

224 春月　吹はらふ風にぞいづる夜はの月春は霞を山の端にして　中院大納言

225 納涼　たちよりてむすぶ清水の岩がくれあつさかきやる袖のすゞしさ　同

226 寄山恋　なさけしらぬ心をみれば山の名の岩木はいはじ人のつれなさ　同

十一月十五日夜、於　仙洞三体詩絶句之内、句題十首之御当座

227 澗花然暮雨　のどかなる夕の雨を光にて澗にも春の花やさくらん　院御製

228 夕暮の雨に咲てや澗の戸の花もあしたの雲となりけん

229 高岫留残照　山たかみ光は雲に猶はれて梢にしづむ夕日影哉　中院大納言

230 はるかなる峯の梢におつる日のむかひの山の影ぞさやけき

231 寄月花　散初て雪にまがふな花とみむ月さへかほる春の夜な〳〵　烏丸大納言

232 あかずみんかすみもはてぬ雲ゐより月は木のまの花の下かげ

233 松藤　時わかぬ緑の色も藤浪のこき紫に松はそめけり　同

234 松風の吹やる方にしられけりかゝれる藤のながきしなひも

235 夏月　手にとらぬ扇の風もをのづから月にまかせてあくる閨の戸　同
236 嶋月　ながき夜を月におぼゆる秋やなき池の御舟の嶋めぐりには　同
237 閑居秋風　さびしさも後は忘れて夕風のをとばかりする軒の下荻　同
238 待恋　露のまに千年もへなんかならずとたのめし暮にきえかへる身を　同
239 後朝恋　玉しゐは袖に入にし別より又ねの床にそはぬ面影　同
240 寄鏡恋　人にのみうつす心のますかゞみわがみの方ようらみだにせじ　同
241 山家嵐　柴の戸に心さまさぬさ夜あらし同じ夢のみなにさそふらん　同
242 神祇　神代よりけふまでさして三笠山君と臣との道ぞたどらぬ　同

十二月廿仙洞御会

243 春雨　道とをくきてやおぼゆる行人のぬるゝ斗の衣春雨　院御製
244 春野　分みればをのがさま〴〵花ぞさくひとつ緑の野べの小草も　同
245 夏関　をのうへにきゝおひてこそ鵑まつに奈古曽の関の名もうき　同
246 恋泪　別行我袂には色かへて身をのみ歎涙さへうき　同
247 旅夜　をきそふや故郷とをき露ならんさゝの枕の一夜〳〵に　同

同日同前

248 冬風　落葉せし梢はよそにとひすてゝ尾上の松にさゆるかぜかな　中院大納言
249 恋夢　さ夜衣さめてかひなき今の身のうつゝを夢に又かへさばや　同
250　おどろきてさめつる夢に鳴鳥を人にうらみて誰わかるらん

251 恋扇　たづねゆき月の行ゑのかひもなしとりもかはさぬねやのあふぎは　同

252 旅朝　夜をこめていそぎやいでし我斗をくるゝ道に行人もなし（の・き）　同

253 旅友　ふる郷のさかひは人にかはれ（る）とも忍ぶ心の道はへだてじ　同

254　行つれてかたらふ友は都おもふ心も同じみちやわくらん

十二月十七日禁中御月次当座

255 逢恋　面なれしよるの衣の夢ながらかへさぬ床にみるがうれしき　中院大納言

256 紅葉　おくふかき紅葉にぞみる分すてし外山の秋の浅き露をも　同

寛永十四年

257 元日　時をえて今年はせめて波越よ名にたつ老の末の松山　三条前内府

於東国去年新宅拝領云々世

258 同　にほへ代に年と宿とのあたらしき心の花も折にさかせて　烏丸大納言

正九日仙洞御会始

259 南枝暖待鶯　〳〵行かりは（かりがね）も跡にみすてん花のかに鶯いそげ春の初風

260　まだきよりきなけやどりはかさゝぎのめぐる樹の春の鶯

261　鶯の声待かたは雪消てみなみどりなる春の松が枝

262 同　〳〵君がためけふは南に子日してのどかにも待うぐひすの声　三条前内府

263　霜雪もとけてぬるめる枝の方にまつともしれな春の鶯　同

264 同　／鶯もきなけすつくる鳥もあるかた枝は春ののどかなる日に　中院大納言
265 春日野丶松にはやなけ鶯もはつ音おしまむ今日の春かは　同

正十七禁裏御会始
266 春色浮水　こほりゐし硯の水の海よりも咲いづる花はやまとことの葉　三条前内府
267 同　万代もすむべき春かとめて落る水もみどりの水のおの瀧　中院大納言

正廿三板倉周防守興行、懐紙
268 幸逢太平代　百千鳥百の司もすなをにとさへづる春かおさめしる世に　三条前内府

同当座
269 初春　たたちまよふ雲も霞もふる年の雪げをうづむ春の色哉
同　同
270 海路　ままほにふく風にしあらばのる人も心しづめよ行舟の中　同

二月卅日仙洞御当座
271 花漸散　日数こそつゐにつらけれ山風のさそはぬ花もあを葉そひ行　御製
272 梨　ふる雨にまじらぬ雪の枝おもく（たはに）つもる色そふ山なしの花
273 雲雀　夕ひばり我ゐる山の風はやみふかれてこゑのそらにのみする
274 寄木恋　人心花にうつろふならひより我かたはらのみ山木もうき
275 閑居　我心しづがならずはしづかなるかくれ家とてもちりの世中
276　山ふかく物にまぎれぬ栖にもすめる心のしづかならずは

同前之御会

277 竹鶯　置霜にむすぼゝれても鶯の声を春なる窓のくれ竹　中院大納言

278 くれ竹のおひさきこもる窓のうちに声ならすなりひなの鶯

279 春暁月　雲にあふ影よりも猶わりなしや暁ふかくかすむ夜の月　同

280 桃花　盃を人にすゝむる春風に花さく桃も酔る色なる　同

281 花さかむ三千世を桃の百かへり庭にみるべき春の久しさ

282 折躑躅　折そへて山がつの袖の色こき岩つゝじ哉　同

283 折そへてかへるつま木に山がつの袖の色こき岩つゝじ哉　同

284 夕樵歌　柴人のやすむたよりの岩つゝじ折残す花は心ありけり

285 山人のうたふこゑさへたど〳〵しおもき薪のくるゝかけ路に　同

286 帰るさを月まちてとやすむらん小坂にうたふ山人の声

寛永十四閏三廿四禁裏御月次

287 湖水　すはの海にうつれるふじはをのづから氷のうへにうかぶ山かな　三条前内府

288 さゞ波も松よりとをく音のして氷にひゞく志賀のうら風　同

289 歳暮　品々はあさとみえてもよくみればひとつにはやくくるゝ年哉　同

290 稚子（ウナヒコ）の手なるゝ春の物ごとをあつむるおやの年ぞ数（も）そふ　同

291 寄門恋　こたへせぬ夜はゝあけつゝ柴の戸をへだてゝかへる身をぞうらむる　同

契りをきし松の門をばあけをけど人めしげくてかへる身ぞうき　同

同日之御会
292 谷鹿　／秋ふかき谷に入てもとふつまのうきたびごとに鹿やなくらん　中院大納言
293　さをしかやつれなき妻を問わびて谷の戸ふかくおもひ入らん　同
294 祈恋　／うけひかぬ心ぞみゆる我ゆへや神もしるしのなきなおひなん　中院大納言
295　年をへて人にみはてんつれなさをしらする神やいのるかひなき　同
296 名所山　／陰たかきはこやの山の日の光さす大内の春もくもらず　同
297　くはゝれる春のやよひの後せ山後せかはらず咲花もがな　同
寛永十四三廿二仙洞御当座　自今日三日三夜之御遊
巻頭
298 待花　さかばともちぎらざりつる春にだになをざりにやは花はまたれし
299　／いかゞこゝに千代も待みむ花の友あかぬ心に春をまかせて
300　残りなくさかずはうらみ桜花待しもけふのためにやはあらぬ
301　桜花待しもけふのためとてや残らぬ色を枝にみすらん
同年四月廿四禁裏御月次当座、以下三首
302 風前梅　梅がゝはさそひもすらしさかりなる花にはまけて風ぞ散行　三条前内府
303 首夏　衣ほす時はきにけりけふはまたみどりにはるゝ天のかぐ山
304 夜恋　わが身をばもとの身にして月やあらぬとばかりまよふむかしをぞ思ふ

時は卯月はじめにや、　大樹の御めぐりの御鎮守　東照大権現の御社御造替の地引おはしまして、人群をなせしを、そ

の所へいづくともしらずしら靏ひとつおりきたれり。おりしもあれ、千年の御宮ゐもしるく覚えけるに、又天飛靏二つおなじ所に舞くだりけり。誠に御代のさかえも相生ならん。神の御納受をつげしらせ給なるべし。延喜の御代白鷺の聖徳になつきけること、世中にいひのゝしることなれば、あまねき御めぐみの、鳥獣にも及侍るは、そも〳〵おさまれる御代哉。

305　宮づくりうれしき神の御心とちとせやつげて靏も立まふ

306　さらに又千年はしるし友靏のつばさならぶる神のひろまへ

江戸ノ城廓の東照権現の社の松に靏のとまりしに、彼是作文ありと也。烏丸大納言のとて、忠兵衛といふ亡羊門弟ノものみせしまゝ写了。

寛永十四年七月廿四日禁裏御月次当座

307 氷　雪をさへ夜半にかさねて水よりも寒き岩ねの朝ごほり哉　院御製

308 暁　鳥がねに起いづるよりよしあしのわかるゝ道をおもはざらめや　同

309 田家　秋風のやどりとやなすもる人もかりていなばの小田のかりほは　同

右、余分なし。

同日

310 湖雪　春またでかへるとぞみる志賀の浦やこほる汀の雪のしら浪　中院大納言

311 旅　くれぬとて草の枕をゆふ露の我よりさきにやどりがほなる　同

同前

同　同　六日、三条前内府家の月次会当座云々。後日伝聞之間書付了。

312 すはなすゝき　すだれまきみればしげくも作るなる草の戸をせばはなすゝきかな　三条前内府

同年八月二日仙洞御当座卅首

313 秋夕思　／身をしほるならひよいかに世やはうき人やはつらき秋の夕ぐれ　御製

314 たが秋か露の外なるなく鹿も籬の虫もたへぬゆふべに　同

315 寄草恋　／道たゆるやどの浅茅の秋風をまくずに返すよべとだにしれ　同

316 ほにいでゝみだれん末の露はうしつゐに尾花がもとの心も　同

同日

317 里擣衣　／荻の葉にね覚はなれし秋風を又音かへてうつころもかな　中院大納言

318 秋風をうらむるあとやよさむなる里のしるべに衣うつらん　同

319 寄虫恋　／ひをむしのまたぬ夕をおもひにて消ぬを頼む身さへはかなし　同

320 心から誰を松むし我ためのゆふべをしるや声のうらむる　同

同年同月廿三日仙洞御当座

321 残暑　／とはゞやなまだ世にしらぬ秋風もさこそいく田の森のすゞしさ　御製

322 秋きても猶たへがたくあつき日のさすがにくるゝかげの程なさ　同

323 寄露恋　こよひだによし思ひしれぬれてこし萩ちる小野の露のかごとは　同

324 ／おもひやれ人の心の秋も秋露も空なき露の袂を　同

同御会

325 新秋　／吹そむる関のかなたの音もきけ御前の山のけさの秋風　烏丸大納言

326 秋きぬと砌の木々もあらためて先をく露や玉はやすらん　同

327 初雁　くる秋にきゝてぞ思ふ花よりも月は都のはつかりのこゑ　同

328 ／雲まなるひとつふたつのかりがねはまだ難波津やはなちがきする　同

同年四月廿四禁裏御月次御当座

329 夜虫　折しもあれ夜さむの衣かりがねにはた織虫も声いそぐらし　院御製

330 山朝霧　嶺つゞき吹かたみえて朝霧の風の絶まはたえまだになき　同

331 関鶏　名残あれや鳥がなく音に起いづる関のかや屋の月をのこして　同

332 名所橋　世をわたるみちもこゝより行かへる人やたえせぬよどの継橋　同

御余分なし

同御会

333 雪中鶯　をしなべて木のめ雪ふる春の色のうづもれぬこそうぐひすの声　烏丸大納言

334 夕卯花　なぐさむや分る山路の夕ながめなにうの花のうきなだてなる　同

335 納涼　さゆる日の氷おぼえてむすぶよりあつさはきゆる山の井の水　同

336 寄鏡恋　涙もてくもる鏡は山鳥のおろのはつ尾の影もたのまず　同

余分なし。

同年十月十六日於　国母御方当座、通題云々。

337 寄世祝　雲の色の空に残れる方もなく月日くもらで世をてらすらん　三条前内府

338 同　齢まで君と臣とのあひをひに松こそ千世も霜雪のうち　烏丸大納言

339 同　祈りをく千とせは世々につきもせじありとある人のひとつ心に　御製

寛永十四十廿四禁中御月次当座

340 梅　大空におほはん袖につゝむともあまる斗の風の梅がゝ　御製

341 社卯花　白妙の衣ほすかと川やしろしのにみだれてさける卯花

342 籬瞿麦　はへあれやくろ木あか木のませのうちにさくなでしこの花の色〳〵

343 〳〵朝な夕な籬の露やかぞいろとおほしたてけんはなのなでしこ

344 松　百敷やうへて我世をおもふにはいく程ならぬ松の木だかさ

345 梅　冬ながらふゝめる梅は心よくさきだつ花や春をつげまし　三条前内府

346 夜盧橘　春は花夏はたち花その葉さへよるさへにほふ宮のうちかな

347 不逢恋　思ひねをさめての後もたのむなりうつゝかなしきわが心とて

348 暁述懐　老が身はまどろめばはやさめやすく時をかぞふるあかつきぞうき

349 里郭公　さだかにも中〳〵もらせ郭公忍ぶの里に初音なのらば　烏丸大納言

350 暁鹿　聞からに妻どふ鹿ぞあはれなる暁がたの声はうらみて

351 紅葉　〳〵立田姫その山の名の下紅葉はへある露も色はみゆらん

352 露時雨千しほにそめし色みてば紅葉ににほふ香をばもとめじ

353 雪　ふりそめし今朝はひとへも九重やつもらばいかに庭の白雪

寛永十四十一月廿四禁裏御月次、百五十首御当

354 見花　春をへてみるまよひまで花の陰にたつ事やすき物とやはしる（ごとの身の）　御製

355 夜荻　ふかき夜の物にまぎれぬしづけさや声そへけらし荻の上風

356 寄糸恋　いはゞやな下のうらみのふしおほきしづのしげいとくり返してもつゝ

同御会

357 夏草　はらひえず又もえいづる夏草に春の色みる真砂なるらん　三条前内府

358 氷初結　ろくろひく板井の水の下たりのたまるかたよりまづ氷りけり

359 冬月　落葉して秋をのこさぬ木のもとはさびしき月の影ぞかさなる

同御会

360 簷梅　とめきてもにほひをしらば梅の花宿の軒端の一木とはみし　烏丸大納言

361　玉だれの釣簾捲袖のあけぼのをにほひにこむる簷の梅が枝

362 寒草　わきてその荻の名だての風もなしまねく尾花も霜枯のころ

363　冬がれをみすてん野べの草葉かは緑にかへる春は待とも

364 常盤木雪　つもらせん雪のためとや常盤木は落葉を冬に猶もらすらん

365　山ふかみつもらぬ程もながめばや真木たつかたのけさのうす雪

正十七、書落候間、コヽニ書入了。

366 春色浮水　関河やためしもみせて君と臣の心あはする水の春風　烏丸大納言

367　むかひみん花の鏡と思ふよりおられぬ水にうかぶ面かげ　同

寛永十五年

368 元日　あら玉の年の光はやしまにもいたらぬ春のあらじとぞ思ふ　烏丸大納言

正十四仙洞御会始

369 鶯声和琴　〳〵しらむるも名におふ春の鶯のさへづることの音にかよひつゝ　御製

370 あら玉の春のしらべは鶯のこゑそへてこそことにきこゆれ

371 千世こもることの下樋にかよふらし百よろこびの鳥の初音は

372 〳〵玉琴のことぢになれてかたらふは春をしらぶる鶯のこゑ　三条前内府

373 春ごとのしらべをこゑにさきだて、羽風のどけき枝のうぐひす

374 〳〵引ことのいとをたよりにあやなすや柳が枝のうぐひすの声　烏丸大納言

375 琴の緒のつらなる鴈や花の香もさそひてたぐふ鶯のこゑ

376 〳〵琴の音にひゞきぞかよふ籠の内によるなく鶴や春の鶯　中院大納言

377 鶯のなく音も春にひくことの調かはらず千世ならさなん

378 引ことの心はしらじ鶯もよる鳴鶴にかよふこゑ哉　御会以後此哥に可改よし被申了。

379 〳〵鶯もかきなす琴にひかれてや春のしらべのこゑをそふらん　中院中納言

380 鶯の声もさながら琴の緒によりあはせたる春の松風

正十九禁中御会始

381 寄道慶賀　君が代の春をば花にふしておもひおきて八雲の道やあふがん　烏丸大納言

382 野も山も春にはあへず雪とけて道の道ある光うれしき

383 思ふことのみち〳〵あらん世の人のなべてたのしむ時のうれしさ　御製

384 行人のとをしともせずあづまぢのみちのはてまでおさまれる世は

385 みちしあればはこやの松の千世の色をけふ九重の春にそへつゝ　三条前内府

386 よろこびの心にあまることの葉をみせて雲ゐに敷島の道　中院大納言

387 うれしさやすゝむみちある時ならんたち舞袖のとにもかくにも

正廿日左大将会始

388 庭梅久薫　春をへて世々にみぎりの梅花ふかきにほひは家の風かも　烏丸大納言

389 咲そめて幾日をへぬる庭の梅ににほはせてみん桜はやつげ

正廿四日禁中御月次

390 葛風　一方に野べの千種（草木）はなびけども真葛にかへる秋の風哉（風やみゆらん）　中院大納言

391 ／ふく方になびく草木の秋風も真葛ひとつにかへるとぞみる　同

同日

392 山風　／山ふかみあらしの軒は／松ふりて（春さえて）／春の日影もうとき下庵（松の）　同

二月七於仙院梅宴之御会

393 野梅　／咲やこの春やむかしのにほひをば平野に残す梅のした風　烏丸大納言

394 山をみせ芝の砌のうつす野にときも遅も咲ぬ梅なき　同

395 暁梅　にほふなり猶世にしらぬ梅がゝに霞の洞のしのゝめの空　同

396 ／梅がゝ（も）のうつゝやふかき暁の夢のうちなる花はさめぬる　同

同前

397 山路梅　柴人のさえかへるとやたどらまし身にしむ程の梅がゝぞする　三条前内府

398 春風の爪木に匂ひ吹かけて梅がゝしらぬ山人もなし

399 白梅　あまたなる木々の中にも香をふかく真砂を色に咲や此花　同
400　盛なる花にまがはで梅が枝の霜の雫ににほふ色かな
同前
401 初梅　吹もまだあたゝかならぬ春風に露待あへず匂ふ梅がゝ　御製
402 雨中梅　心あれや雨もふり出て紅の色そふけふの庭の梅が枝　同
同前
403 若木梅　咲梅の秋なき時の色香をもわか木の梅や春にみすらん　中院大納言
404 梅浮水　行水に色やはとまる散梅のはなはにほひを淵とせきても　同
五月廿四日禁中御月次
405 秋神祇　稲葉にやあまるめぐみの露ならんあまたの神にたつるみてぐら　御製
406 春恋　いかにせんとはれん春もたのまれぬ身はうぐひすのこぞのやどりを　同
407 春釈教　てらしみよ春日に消ぬ霜もあらじ野べのわかなのつみはありとも　同
408 春池　冬ごもる岩ねの春にうつりきて氷はもとにかへる池水　三条前内府
409 夏杜　しげりあふ夏草とてもふみからすかた山かげの杜のすゞしさ　同
410 秋夕　みればたゞさてもとがなき夕暮をいつの秋より名にはたてけん　同
411 夏海　伊勢の海やきよき渚のくるゝ夜にひろはん玉はとぶ蛍哉　中院大納言
412 夏田　うへたてし早苗にしげる水草をとるさへ賤がいとまなげなる　同

413 秋夜　おどろかぬ夢みて後も鳥の音をまたるゝ程の秋の夜ながさ　同

已上三人共以今日余分ナシ。

六月廿五日聖廟御法楽

414 夕荻　荻の葉に聞もすつべき秋風を身のならはしもうき夕かな　中院大納言

415 夕ぐれの秋のならひをうき物に思はじとするも荻の上風（れば）　同

六月廿四日禁中御月次

416 林首夏　すむ鳥も春より後やうしとなくちりし昨日の花のはやしに　御製

417 岸千鳥　松ならぬねにあらはれてさ夜千鳥浪うつ岸に妻やとふらん　同

418 冬池雪　乱れふすあしまぞ消（を）ま冬の池の浪はすくなくつもるしら雪　同

此一字、三条前内府異見。

同前

419 瀧辺時雨　ふる音は瀧にせかれて梢より時雨の色をながす山風　三条前内府

420 嶺樹深雪　嶺たかみあらしを頼む松が枝下折なびく雪の中かな　同

421 歳暮　くり返し又（あす）わかやぐと老人の一夜（むかし）の春を待（思ふ）ぞはかなき（さ）　同

422 古郷郭公　住人ぞふるき軒端の鵑なれよなく音は今もかはらじ　中院大納言

423 初五月雨　空ちかくかさなる雲にふり出て五月雨しるき昨日けふかな　同

424 樹陰夏風　すゞしさもよるこそまされ梓弓いそべの山の松のした風　同

七夕　禁中御会

425 代牛女述懐　おもふぞよ天津日嗣も天川神代のちぎり絶ぬ行ゑに　御製

426 世はなにの道もかへらぬむかしにはあふ瀬まれなる天河浪　同

427 星合の空にもさこそ物ごとにあく時しらぬ人のおもひは　同

428 秋といへばいなおほせ鳥のをしへをや今も忘れぬ星合の空　三条前内府

429 ／人の世のうき瀬は天の河浪にあらぬかたにも星やしるらん　中院大納言（此三字、三条添削。）

430 七夕は浪のさはぎの世をしらぬ中にやわたす天の河はし　同

四月廿四日禁中御月次。後日聞及、依注此所。

431 駒迎　世に絶し道ふみ分ていにしへのためしにもひけもち月の駒　御製

432 被厭恋　つげばやななぎたる朝の我袖につゐに身をしる雨はしげしと　同

433 旅泊夢　おもひやれ夜をへてなるゝから泊夢をばみする浪のあはれを　同

434 ／舟人のいつから泊浪馴てさすがみる夜の夢もかなしき

七月仙洞御会

435 郭公幽　一こゑの空ぞ明行郭公鳴つるかたの月もほのかに　御製

436 跡したふたゞ一こゑはほと、ぎすとをき入さの山の端の色

437 名所鶴　住鶴にとはゞやわかの浦波のむかしにかへる道はしるやと　同

同御会

438 早春霞　うちなびき春くる色もかすむ也これや時しる初なるらん　三条前内府

439 浦千鳥　浪の音にたちわかれてもさよ千鳥友をわすれぬ浦風ぞふく　同

七月廿四日禁中御月次

440 有明月　明る夜のしらむ光や池水の月の氷をわたる春風　御製

441 沢間秋夕　夕ぐれの秋は涙も色になる野沢の水に流そふまで　同

442 夕まぐれ鳴たつ秋の沢辺にはうき曉の羽がきもなし

443 木葉随風　秋風に又やまかするさめなく（ママ）／すらし、此点、中院大納言合点云々／折ふしの風には又やまかせ行時雨にそめしこゝろ木葉も　同／梢ゆく

444 世中よ又秋風にまかすらし時雨にそめし——

七夕に宗具といふ医師のかたへつかはしけるとなん

445 生薬とるかぢの葉に天河御祓の後もけふみそぎする　烏丸大納言

八月十五日仙洞御会

446 瀧月　これも又瀧なくもがな帰るさを月はをくらん秋の山路に　御製／りこん山路はさこそをくる月かげ／月もをくらめ

447 月ぞ猶影もとゞめぬよしの川花はせかれし瀧つ岩ねに

448 海月　くもらずよむべも心あるあまのかるも中の秋の浪の月かげ　同

449 海小船都につげよわたの原八十嶋かけておもふ月影

450 月前鹿　秋はけふと月のかつらの中空に鹿のこゑさへすみのぼるらん　三条前内府

451 くもりなき月を心にさ男鹿のせとわたる声をさだかにぞきく

452 月前席　更るをも身にはおぼえずみる月のねやのむしろにかげぞさし入　同

453 かりてほす露のわさ田のいなむしろ月吹風に色ぞこぼるゝ

八月廿四日禁裏御月次

454 霙　山風や暮るまに〳〵さむからしみぞれに雪の色ぞ添行　御製

455 尋恋　あらしふく秋より後はとこなつの露のよすがもたづねわびつゝ　同
456 顕恋　つゝみこし思ひの霧の絶〳〵に身はうぢ川の瀬々のあじろ木　同
457 寄絵恋　かひもあらじかたちはさこそうつすとも月は光をえしもかゝねば　同
458 寄商人恋　あはれ身におはぬ歎は商人のきぬきたらんがたぐひさへうき　同
459 元日宴　みきたまふ春をむかへて門ひらく声ものどけき宮のうち哉　三条前内府
460 野分　野分して千種の色の散方に花の香かどふ朝ぼらけ哉　同
461 野行幸　翁さび人もとがめじ御かりのゝ道をもふまん世にしめぐれば　同
462 衾　露ながら板間を風やもりつらん衾もおもく夜ぞ更にける　同
463 朝恋　おもふすぢを人にしられぬ朝ねがみ心のうちにみだれ行ても　同
重陽禁中
464 花中唯愛菊　春秋のはなをひとつにかほらせて咲ともにほふ菊にけたれん　三条前内府
九月十三日仙洞御会
465 月下浅茅　しづけしや人もはらはぬ露ふけて月影おもる庭の浅茅生　御製
466　けふだにも　あたら夜の月や更行浅茅の庭　同
467 月下旅泊　浪風のさはぎしよりもとまり舟おもひのこさぬ月ぞねられぬ　同
468　けふこそは千里の浪のうきねにもみやこおもはで月はみるらん　同

寛永十六年

正九仙洞御会始

469 春風春水一時来　／うき草の末より水の春風を吹（いで、ふく）をこしてや四方にのどけき（世に吹そめてのどけかるらん）　御製

470 神風やみもすそ川の水上にさだめし世々の春はつきせぬ

471 あらたまる春のしらべにかよふらし泉の声も松のひゞきも

472 氷とく汀の浪にうちそへて梅がゝよする池の春風

473 池水に千世のみどりをせき入て松にや風の春をつぐらん　中院大納言

474 松風もけふより春の色に出て千世せき入る庭の池水　同

禁中御会始

475 毎家有春　／今すめる霞の洞の宿もあれど猶九重の春ぞのどけき　御製

476 なべて世は梅や柳の時津風たが垣ねかは春をへだつる　同

477 ／我家の春の光にあらそふや人／をへだてぬ君がめぐみを　中院大納言

478 めぐみあれば上中下のほど〳〵に我身の春をやどにむかへて

二月廿二水無瀬宮御法楽

479 早春　朝日影きえあへぬ雪もしらとりのとば山松は春もわかれず　御製

480 ／けさよりぞ氷ながるゝ水無瀬河春のしるしのありてゆく瀬に

481 窓燈　／窓の内に我世もふけぬ灯を今はねられぬ友にかゞけて　中院大納言

482 よそに見ん影もはづかし光なき身の程てらす窓の灯

寛永十六年三月下旬沢庵東国下向之時、大樹へ被遣物三種、竹之香箱入家〈下二十／上十二〉二重、蟹石、柏石〈此石

如柏葉／長七八寸斗〉、被添御短冊別入箱〈タメヌリ、緒アリ／有相タルハコ也〉
483　常にこそあらはれずとも玉かしはかふるにあかぬ心をばみよ〈御短尺、ウチ曇、下絵／アリ、二行〉
三月廿三日被遣大徳寺、岩倉中将御使、予相添一封了。
三月廿七日
484 牡丹　／思へども猶あかざりし花をさへ忘る斗のふかみ草哉　御製
485　咲花の数さへそひて紅の色もことしはふかみ草哉
七夕禁中御会
486 七夕月　天河ながるゝ月も心してまれのあふ瀬に光とゞめよ　御製
487　夕月夜とく入比ぞ七夕の舟出をいそげ天の河長
488 七夕河　なきこふる涙の川に七夕のうへてみるめもけふやかざらん
489 七夕草　うへみんもしらずや星の手向草此七種は花もまじらず
490 七夕鳥　かへまくも星の契よをのがうへに思はをしのひとりねぬ夜を
491 七夕衣　かさねても夢とや思ふ七夕のかへしなれたる中の衣は
492　七夕の衣のすその秋風にうらめづらしくかさねてやぬる
493 七夕別　いかに又汀やまさる天河今朝しもかへる浪の名残に
494 七夕祝　星合の空にくらべん君も臣も身をあはせたる代々の契を　同
495 帰鴈　春霞かくす都の山の端をかへりみがちに鴈も行らし　御製
496 落花　山になく鳥の音にさへちる花のむなしき色はみえてさびしき　同

497 松上藤　玉かづら嶺までかけて咲藤に木高き松も谷の埋木　同

498 夜鹿　さをしかも山鳥の音のながき夜をよそにへだてゝ妻やこふらん　同

499 岡篠　かの岡にもゆる木の葉のうらわかみ霜にもかれぬ小篠をやかる　同

五月八日

500 卯花繞家　／月は猶（影は）めぐらぬかたに影すむやつゞく垣ねにさける卯花（のかきねにも咲卯花ぞ）（ひとりさやけき）　御製

501 雪に又ふりこめられぬ卯花の垣ねにあまるをのゝ山ざと

502 人伝恨恋　／そらごとに猶いひなして我うらみきえもいれずとかたるさへうき（わがうらみ人のそらごとにいひなして）

503 かたはしもまなばじ人のことづてをたゞなをざりのうらみとやきく

504 白鷺立汀　／白妙の池のはちすもまださかぬ汀の鷺は色もまがはず

505 さやけしな鷺も鴎も白浪のよする汀にうつる日影は

506 寄月尋恋　しるべなきやみにぞまよふ恋の山かくる月（ママ）を猶おもふとて

507 寄月祝言　月よみの神のめぐみや露ふかくこよひの秋に光（き）そふらん

508 月は猶神代のかゞみかけまくもかしこき影を今も残して

以下三首御哥合

509 冬天象　これも又しろきをみればふくる夜の月さへわたるかさゝぎのはし

510 いくたびか時雨の雲をさそひ出て山風くもる冬の夜の月

511 冬地儀　かれはてゝ中々秋の露よりも色なき野べの色ぞみにしむ

512 板橋や朝風さゆる霜のうへにかよはぬ人のみえてさびしき

513 冬植物　残りけり松の緑の洞の中にちらで友なふ秋（千世）のしらぎく
514 霜をかぬ草もありけりくれ竹のちいろあるかげに冬はかくれて
五月廿四禁中御月次
515 橋辺霞　かさゝぎのわたす　御製
516 そらにたゞかよふ雲路の末ならん霞につゞく天のはしだて
同前
517 曙花　霞ゆく松はよふかき山の端に曙いそぐはなの色哉　同
一條殿一献持参之時、哥の御物語之次、回文の御狂哥
518 嶋のこそくはるれさかなみよしばし世みなかざれるはくそこのまし

寛永十七年

仙洞御会始　正十七
519 風光日々新　／昨日よりけふはめづらし花鳥も千世をならさん宿の初春　御製
520 さくらにも今ぞうつさん朝な〳〵色そふ梅の花の春風
521 民を思ふ道にもしるし白雪のふるきにそめぬ春の光は
仙洞　九月十三夜
522 月前雲　／吹かくる雲さへうれしはるゝ夜の月にむかへるにしの山風　御製
523 くれぬまは八重にかさなる雨雲もおもふこよひの月なへだてそ

524 野月　／武蔵野や草の葉分にみえそめて鹿の音ながらいづる月影（露よりしたに）

525 いか斗うつろふ月のしげからん雨より後の宮城野のはら

526 月前蛬　／白妙の霜にまがへてきり〴〵すいたくなわびそすめる月影

527 きり〴〵すながき夜あかですむ影も今や籬の月になくらん

同御会

528 池月　／くもるともこよひはよしやすむ月の行末ちぎる秋の池水　中院大納言

529 秋風辞ノ心

秋風のこと葉ふりにし舟のうちも御池の月にみるこよひ哉

530 月前席　／ちりならで月にぞつもる長月やけふのむしろの露のことの葉

531 さむしろの塵ならぬ名の空にたつ雲吹はらへ月の秋風

532 月前鏡　／ますかゞみみるかげまでもうつり行末の丶秋にかはる月かな

533 ます鏡見ぬ世の秋もうつるかととをきむかしも月におぼえて

同　十二月廿一日仙洞御当座

534 寄道祝　／九重のなはたゞすなり木の道のたくみもよ丶の跡ををこして　御製

なはたゞすは古文真宝巻之六聖主得賢臣頌、使二離婁督レ縄（ノリヲタクシナハヲ）公輸削レ墨（ヲノケヅラヲ）。当時依禁中造替也。縄タゞスハ縄ハリノ心也。

535 行人のみな出ぬべき道ひろく今もおさまる国のかしこさ

536 寄月恋　／こぬ人の面影くもる袖のうへの涙や月のとがにかこたん　中院大納言

537 思へ人待程さ丶ぬ真木の戸におばすて山の月ふくる夜を

同廿二日

538 恨身恋　〳〵つゐにその里のしるべも海人の刈藻に住虫の我にかなしき　御製

539 思ふにはうきもつらきも誰ならぬうらみのはてぞいふかたもなき

540 思へ人うき身のとがになしはてゝうらみぬまでの中のうらみを

寛永十八年

正十一仙洞御会始

541 雪消山色静　雪とくる春にしづけし年のおのながきはこやの山の緑は　御製

542 昨日みし雪のむもれ木緑にて春あらはるゝ山のゝどけさ　中院大納言

543 世に春と雪げの空も山の端の松よりはれてそふ緑哉　同中納言

同廿八仙洞御月次

544 垂柳臨水　〳〵氷(あさみどり)りとく池の鏡にかげみえて柳の眉も世にたぐひなき　御製

545 きし陰の柳の梢いとたれて松ならなくに越る川浪

546 〳〵青柳の下行水を引いとに緑をたゝむ池のさゞ浪　中院大納言

547 池水のそめぬ緑もかげうつす柳にかよふ春の色哉

同卅　同前

548 梅香何方　〳〵玉簾(ひまもとめ入)もり入風(〳〵春風の)の梅がゝはおもふにあやしいづくなるらん(あやし思ふに　いづくなるらん)　御製

549 朝霞立枝もみえぬかきねよりおもひの外ににほふ梅がゝ(〳〵梅がゝ　春風)

550　咲方をさしてをしへよ海士小舩初瀬の里ににほふ梅が、（の梅のした風）

551　さそはるゝ鶯もがな声とめて木のもとしらん風の梅が、　中院大納言

552　とめて見む軒端やいづこさそひくる風を梢ににほふ梅が、

後鳥羽院四百年忌、松下民部大輔申上云々。去年之分也。当年御清書了。二月廿二日

553　霞　水無瀬川とをきむかしの面影もたつや霞にくるゝ山もと（に）　御製（夕の霞なるらん）

554　／こひつゝもなくや四かへり百ちどりかすみへだてゝとをきむかしを

七月廿六日夜、予夢想。八月廿五日可読上之由聞え申触了。卅一首和哥。れかしら。

555　新（れ）秋露　／黎民のうへるめぐみも秋のくる門田の稲の露やみすらん　中院大納言

556　例よりも袖ぞ涼しきおき出るこの朝露は秋をしらせて

同前ノ会

557　春（き）月　君が代はおさまる風を月にさへみせて霞のおほふまゝなる　同中納言

558　きさらぎやさえかへる春のかぜもなし月は霞の衣かさねて

重陽禁裏御会

559　菊送多年秋　雲の上や今年はなれぬ籬にも千とせ忘れず匂ふ菊かも　中院大納言

560　／いく世々の袖のひかりぞ雲の上や星を手につむ秋の白菊

霜月於大門当座

561　夜鹿　秋ふかみあはぬ夜おほく鳴鹿や重る山の妻をとふらん　中院大納言

同

562　山家　さびしさのけぶりもいかゞ山里は柴とるみちも雪にうもれて　同

右両首は余分ト云々

寛永十九年

正月十九日禁中御会始

563 柳絲緑新　万代をまゆにこめてやくりかへす年のをながき青柳の糸　中院大納言

564 ゑみのまゆ春にひらけてもえ出るめもあをやぎの枝なびくらし　同

同廿三日仙洞御会始

565 為君祈世　千世もしるし御かきの竹のふして思ひをきてかぞふる人のまことに　御製

566 やすかれと万の民をおもふまで代々の日嗣をいのる外かは

567 九重の君をたゞさむ道ならで我身ひとつの世をばいのらず

二月於大門主当座

568 湖上霞　みぎはにはよするともみず志賀の海や今朝は霞の奥のさゞ浪　中院大納言

同　同

569 暁恋　身にはまだ別もしらぬ鳥の音に涙をそへてなく〳〵ぞきく　同

卯月　同　同

570 冬夜月　半空に時雨し雲は木葉にて梢の月も風にさゆらん　同

女院庭上被造茶屋、重宗朝臣〈板倉周防守〉承奉仕之云々。十一月廿日始而渡御之時、重宗朝臣拝領

あたらしき亭のさま〳〵にしつらひたるにて、月いで、後、人のうたふを聞て、家づくりたぐひなしといふことを、折句によめる

571　幾よをへ月も見るべくりちの哥くりかへしうたひ猶かげもよし　御製

霜月廿七日於国母御殿　仙洞御物語

572　啐啄同時眼　さやけしなかいこをいづる鳥の音にやぶしわかれず明る光は　同

573　啐啄同時用　立ゐなくかいこの鳥の翅こそ山もさはらず海もへだてね　同

574　栢樹子　染なさばうしや西よりくる秋の色に色なき庭の梢を　同

575　応無所住而生其心　ぬしやたれとはゞこたへよ蜑の子の宿もさだめぬ波のうき舟　同

寛永廿年正月四日　御物語同前

576　狗子無仏性　かくれ家のいづくかはあるゑのこ草それかととへば山梨の花　御製

雲南

577　徳山棒　明石がたせと越舟をうつ浪に岩ほも山ものこる物かは　同

578　風清し山つらなりて水とをき入江の浪の白き扇は　同

寛永廿年

正月十九日禁中御会始

579　緑竹年久　あひにあひぬ御垣の竹も此君の千世に千尋の陰をならべて　中院大納言

580　うへしより日々にかはらぬ契りあれやうてなの竹の代々の緑も　同中納言

同廿三日仙洞御会始

581　梅花告春　世をめぐむみちにもうつせ天がしたみな春にあふ梅のにほひを　御製

582　立ならぶ松風ながらにほひきて梅も千とせの春やつぐらん　茶地丸

583　草の葉のみそかしらする種もあれど春をば梅やまづにほふらん　中院大納言

同二月廿二水無瀬宮御法楽、懐紙

584　柳桜交枝　花の時にあはずはなにを玉のをの柳桜にあかぬ春かな　御製

同同廿五日　聖廟御法楽二首御懐紙御独吟。右一首御懐紙も同御独吟也。

585　梅薫袖　袖ごとににほひぞうつるいやしきもよきもさかりの梅の下風　同

586　社頭祝　代々かけて憑む北野の一夜松ひとつふたつの道のためかは　同

右同日於御所拝見

587　世尊拈華迦葉微笑　ゑみのまゆひらけし花は梅か桃か誰（タレ）しらざらんたれしらずとも　同

588　徳山入門便棒　あかし潟迫門こす舟をうつ浪に巌も山も残るものかは　同（577重出）

589　僧問趙州狗子還有仏性也、無州云無　かくれ家のいづくかはあるゑのこ草あれはとゝへば山なしのはな　同（576重出）

590　僧問趙州如何是祖師西来意、州云庭前栢樹子　染なさばうしや西より来る秋の色は色なき庭の木ずゑを　同（574重出）

591　高亭隔江見徳山便曰不審、徳山挙扇招高亭忽然大語　風きよし山つらなりて水とをき入江の波のしろき扇は　同（578重出）

同七夕禁中御会

592　織女夕心　夜をいそぐ心にけふも物やおもふ天津星合の雲のはたてに　中院前大納言

同七月廿七日仙洞御当座

593　寄月恋　／面影の我に向てかきくらす人はさやかにみん月もうし　御製

594　諸共にみし世忘れぬ面影にきりふたがりてくもる月哉

595　たのめこし人の心の秋たちて木のまの月をみぬ暮もなし

同前

596　秋欲暮　／長月の有明の月の山颪よ空にも秋の色ぞすくなき　中院大納言

597　長月と頼む物かは鳴鹿の声のうちなる秋の日数を

十二月九日　雪のふりける日仙洞へまいらせられける御製

598　霜の後まがきの竹の雪みればまだこぬ春の花かとぞみる

御返し、御短尺、竹枝につけらる

599　今よりは雪もてはやすことの葉も御垣の竹のよゝにつもらん　院御製

七夕禁中御会

600　織女夕心　夜をいそぐ心にけふも物や思ふ天津星合の雲のはたてに　中院大納言（592重出）

寛永廿年九月

601　寄月恋　面影は我に向てかきくらす人はさやかにみん月もうし　院御製（593重出）

602　諸共にみし世忘れぬ面影に霧ふたがりてくもる月哉（594重出）

603　たのめこし人の心の秋たちて木のまの月をみぬ暮もなし（595重出）

604　秋欲暮　長月の有明の月の山颪よ空にも秋の色ぞすくなき　中院大納言（596重出）

605　長月と頼む物かはなく鹿の声の内なる秋の日数を（597重出）

寛永廿一年

606 試筆　年の内にたち初し春はきのふといひけふより君が御代ののどけさ　中院大納言

十月廿一日禁中御当座

607 寄衣恋　〳〵みるめなきうらみよりけに中〳〵のしほやき衣ぬれそふもうし　院御製

608 返しても夢だにうとき小夜衣つらからぬ中にいつかうらみん

同

609 寄月恋　〳〵ぬる夜はもなく〳〵ぞみるこぬ人のまたるゝ月に袖はしぐれて　中院大納言

610 ながめてはなぐさみぬべきよひ〳〵にわりなや月のさそふ面影

十一廿九禁中御当座

611 寄亀祝　〳〵九重にうつせるかめの山はげにしらぬ千とせの後までもみん　院御製

612 思へたゞ誰もかくしてむつかしき世の外にへんかめのよはひを

同

613 嶺紅葉　立ならぶ尾上の木末色わきてわすれし松をみする紅葉ゝ　中院大納言

614 嶺たかみ残る日影も染るかと紅葉にはるゝ夕時雨かな

以下二首翌日披講了。

615 〳〵峯めぐる時雨の〳〵梢緑色わきてわすれし松を紅葉にぞみる

616 立ならぶ尾上の梢色わきてわすれし松をみする紅葉ゞ

十二八禁中御当座

617 落葉霜　〳〵かさなるを吹みだす風にけさの霜半をきたる落葉もぞある　院御製

618 いひしらす薄まじりに霜結ぶ落葉色こきあさぢふの庭

同　朝かぜに吹やられてや松陰も猶霜ながらつもるもみぢ葉

619 旅宿夢　名残あれやかりねの夢の面影をおきいで丶いそぐやどにとゞめて　中院大納言

620　故郷の夢をこずゑに吹まぜてあらしに残る人の面かげ

621　／ふる郷の夢路は風のつてならでふかぬまかよふ人の面影

正保二年

622 試筆　年の名のこぞあらたまの春たちて春待空も先かすむ也（や）（らん）　中院大納言

623 待郭公　待あかし夜床につもる塵ひぢの山鵑あはれともみよ　天載

624 槿　かづらきの神のすがたやこれならん明るわびしき朝がほの花　同

625 七夕　こよひわれ十ふの菅ごも三ふにねて七ふに君をかさ丶ぎの橋　同

626 後朝恋　みし夢をやみのうつ丶になす物は今朝たまくらに残るうつり香　同

八月十五日禁中御会

627（巻頭） 八月十五夜　もとみしもけふのこよひにこの時は半の秋の雲のうへの月　院御製

同御会

628 寄月祝　君のみや松にかぞへん齢をもかぎらぬ月を雲のうへに見ん　中院大納言

伝聞七月廿九日於聖門主当座会云々

629 山月明　かたぶかんつらさ思はですみのぼる山の端ながらみる月もがな　中院大納言

同会

630 神祇　道まもる神もめぐみや猶そはんたえずもよせよわかの浦波　同

八月廿九日於聖門主当座会

631 寄鏡恋　／かはりゆく人こそあらめます鏡みる影さへに涙へだてゝ　同

632　ますかゞみむかふ涙にくもらずは猶身にはづる影やみえまし　同

同会

633 旅宿思都　／面影はうつるもさらぬ都にて旅ねの枕夢はたのまず　同

634　露むすぶ枕はしらじ我ごとくみやこの人よおもひ出とも　同

九月二日禁中御当座

635 女郎花　たがための露ふかゝらし女郎花秋のちくさに思ひみだれて　院御製

636　／たがために思ひみだれて女郎花いはぬ色しも露けかるらん　同

637　女郎花たれ露分て花の色の涙にむせるあはれしるらん　同

同御会

638 寄衣恋　／から衣あふ夜やもれんうれしさをつゝみならはぬ袖にあまらば　中院大納言

639　みし夢に又かへさばやたゞ一夜かさねてうとき中の衣を　同

640　かさねてはうとくなるともから衣かへさで一夜みる夢もがな　同

九月九日禁裏御会

641 翫菊花　置ながら昨日の露を折菊にかざしのわたもけふはにほへる　同

九月十三禁中御当座

642 巻頭 十三夜月　／秋風も雲吹つくせ長月やこよひに残る月の光を　同

643 光もや空にくは、る長月やみたで名におふ月のこよひは

同御会

644 河月　河波に月のかつらのさほさして明るもしらずうたふ舟人　院御製

正保二

645 九月十三夜　久かたのあまぎる雪のこよひしもなべてふれるや峯の月影　長嘯

646 いざなぎのこよひたがへずてらす也おやのいさめの秋の夜の月　同

九月廿九日於聖門主当座

647 初秋露　／秋きぬとふけば草葉にみだれけり風より露も置はじめけん　中院大納言

648 をきそむる秋をばかけし袖の露ほさぬたぐひは草葉にもみず

649 寄鳥恋　／我ためはかぞへてもうき秋なれやこぬ夜斗の鳴の羽がき　同

650 我ためにうらみぬ鳥の声もうし人の別を思ふまくらに

十月五日禁中御当座

651 寄山恋　／人心みはてばわれもやみねたゞよしうき恋の山つくるとも　院御製

652 あともなく木葉のうづむ山よりも我まよふ恋の道しるべせよ

653 寄道祝　みな人のあやうさしらぬ世にぞみる道の心のふかきまことは　中院大納言

十二月六日禁中御月次

654 暮春雨　／ひぢがさの雨にかくれんやどりだにしばしもどらで行春はうし　院御製

655　此夕はなも残らぬあま風にきほひてかへる春のさびしさ

同御会

656　寄天祝　／日の光月もくもらじ君が代は星の位を空にたゞして　中院大納言

657　すめるもののぼりし世より久かたのあめのみことの国ぞうごかぬ

正保三年

九月十三夜御当座禁中

658　寄月恋　ながめてもなぐさむかたぞなかりけるこふる涙にくもる月影　御製

同

659　寄月旅　おもひやるを思ひをこせば草枕古郷人も月に露けき　院御製

同

660　庭上月　庭の面の光もそへと秋風や紅葉の木のま月に吹らん　中院大納言

十月三日禁中御当座

661　古寺鐘　／小初瀬や紅葉吹おろす山風に声も色ある入あひの鐘　院御製

662　かねの声にけふはあすかのあすといひしわがおこたりも今ぞおどろく

同

663　遠村雪　／山もとの軒端の梢おもるとてはらはゞよそにおしき雪哉　中院大納言

664　末なびく竹よりおくの軒端さへあらはにつもる雪の山本

十月廿三日禁中御当座

665 池藤　咲藤もうらむらさきの色に出ぬとはれぬやどの池の心を　院御製

同

666 萩映水　かけもあへずあだにながれん色おし(ママ)萩こす浪の花のしがらみ　中院大納言

十一月四日禁中御会

667 橋落葉　〃散にけり空にみちぬるよるの霜の染る紅葉の橋とみるまで　中院大納言

668 枝ながらわたすとみえて色おしき落葉わすれん谷の柴橋

669 江寒蘆　〃江にしげきあしの葉からす霜の後これもあらはれぬ奥のいさり火　院御製

寒葦露舩灯、三体詩下巻、此詩ノ心也。これあらはれぬとは、十八公栄霜後。

670 夜な〳〵の露を光にかれわたるあしまはれ行難波江の月

正保四年

正月廿四日院御会始

671 遠山如画図　〃つくり絵は霞や残す咲比はまだ遠山の花の千枝に　院御製

672 これも又こゑあるゑとや夕霞山本遠く帰鴈がね

673 色どらぬたゞ一筆の墨書を都の遠にかすむ峰かな　中院大納言

同　二月七日禁中御当座

674 嶺松　〃みねに生る種もしらじな八千世へん御垣の松の春の一しほ　院御製

675 かすむかと嶺のひばらのくもる日も松の嵐のひとりつれなき

同
676 春月　〳〵春ばかり老をも空にわすればやたがみる月もかすむならひに　中院大納言
677 はらひみぬ風さへつらくかすむ夜の月に立そふ雲もわりなし
同廿四日禁中御月次
678 尋残花　〳〵散はてし後の日数に尋みん桜に残る春もありやと　中院大納言
679 猶残るありかをけふぞ尋行こてふを花のまぼろしにして
同
680 塩屋煙　〳〵霞にも海士のしほやは猶みえて煙になびく風の一むら　同
681 やくしほもいかにわぶらんすまの浦やあまの家だにまれの煙に
同廿五日聖廟御法楽
682 寄日恋　〳〵ほすひまも涙かきくらす心にて日影を袖にたのむ物かは　中院大納言
683 心さへうはの空にてくもり日のかげみぬ人にそふ思ひかな
三月廿三日禁中御月次当座
684 河春月　更行ば音のみさえて川水のすめるともなき春の夜の月　御製
同
685 名所鶯　〳〵吉野川鶯きなく山吹のちりなん浪のうたかたもおし　院御製
686 桜ちる御垣が原に行春の故郷さへやうぐひすのなく
同
687 梅薫風　〳〵時わかぬ松に吹さへ咲比はたゞ梅がゝの春風にして　中院大納言

688　行てみんさそふもゆるき春風に梅がゝかすむ野べの遠方

四月三日禁中御当座

689　聞擣衣　夜な〳〵のきぬたの音よ此比の籬の花の名にもねられぬ　院御製

同

690　水辺蛍　さゞれ石の中の思ひを池水の浪に打出てとぶほたる哉　中院大納言

正保四年十月六日、御幸　長谷御覃狩云々

たけがりの興ある日、袖にこきいるばかりは木葉もまだ染あへねば、

691　霜の後又もきて見ん名にしおはゞさこそ八しほのをかのもみぢ葉　院御製

同日　けふの御幸はたけがりのためなりとや。木々の紅葉は八しほの岡の八しほならぬもこゝろありがほなり

692　心して今一たびのみゆきまつ山の木葉や染残すらん　聖護院宮

同十二月廿四日禁裏御月次

693　帰鴈　かへる山ありとやいそぐ越路よりきてもとまらぬ春のかりがね　中院前内府

694　虫　秋風にたのむかげなる葛の葉の枯るうらみを虫やなくらん　同

695　待恋　さのみはと思ふ心のひくかたに又はかられて待もはかなし　同

正保五年

正月十二日仙洞御会始

696　残雪半蔵梅　梅やしる消あへぬ雪の埋木もかたへはなさく春のめぐみは　院御製

697　西こそと秋みし梅や同じ枝を別て残れる雪にさくらん　中院前内府

同十九日禁中御会始

698　鶴馴砌　君がため久しき跡は九重の真砂を数にたづやとむらん　同

閏正八禁御月次当座

699　逢恋　あふ坂の露におもへば袖ぬれしあはでの浦の浪も物かは（は）　院御製

700　あはざりしうき年月を今さらの夜をやへだてんと思ふわりなさ

701　〳〵あればありし此身よいつのならはしに夜をへだてんも今さらにうき（は）　前内府添削

同日

702　忘恋　〳〵わするやとおどろかすにもおどろかぬ心はみえて人のつれなき　中院前内府

703　人よしれありしうさかはわする丶はもとの心にかへるつらさも

慶安元三廿一禁御月次

704　嶺紅葉　よそにみて松や丶みなん染わたすたかまの嶺の木々の紅葉も　院御製

同日

705　寄雨恋　待人のこぬ夜さだむる雨よ猶月みる程のなぐさめもなし（がな）　中院前内府

706　涙さへぬらしそへけり雨そ丶ぎまやのあまりに待うかれては

707　〳〵たへわびぬとはぬ身をしる袖の雨はうきやどりさへ思ひかけねば

同五月廿四日禁御月次

708　瞿麦帯露　かしこしな吾国民をなでしこの花の上まで露おほき代は　院御製

懐紙通題

聖代祇今多三雨露、三体中　露多ハ此コ丶ロヨシ。仰也。

709 ／朝ぎよめ塵をもしばしなでしこの露にをこたれとものみやつこ　中院前内府

710 朝な〳〵咲つぐ花の常夏に露をもみばや色のすゞしさ　同

寛永十四年三月六日、山水の押絵、月に鴈の飛所あるに、和哥の事申入侍し。慶安元年六月朔日拝領了。紙は白唐紙、四方八寸八分斗の色紙形也。

711 こと浦に心もとめず来る鴈やおなじ所の月になくらむ

後撰十一　時〳〵みえけるおとこのゐる所のさうしに、鳥のかたをかき付て侍ければ、あたりにをしつけ侍ける、

712 ゑにかける鳥とも人をみてしがなおなじところをつねにとふべく　本院侍従

此本歌ノコヽロ也。　仰也。

一、永井信濃守に、　仙洞より拝領させられしを、さたの宮の天神の御前につきしに、つぎければ、其花をたてまつりて、これに　御製拝領仕たきよし申ければ、つかはされけるとなん。後日に御物語。唐紙に二詞もなく、たゞ御哥斗あそばされしと也。

713 家の風代々につたへて神がきやたえたるをつぐ梅もにほはむ　此次に、岩倉にての御製御物語、詞書　いはくらといふ所にて花をみて

714 のどけしな風もうごかぬいはくらの山は花さく春のこゝろも　板倉周防守拝領ト也。

同　六月廿四禁中御月次

715 閑中雪　／一とせをわがあらましに待人の道さへとづるやどのしら雪　前内府

716 つもればととはぬを雪にことはりて跡なきもとの庭やわすれん

慶安元九廿四禁中御月次

717 草庵燈　／草の戸のすきまの風に燈の消やらぬ程と住や誰なる　院御製

718　草の庵のくちなん後の蛍よりかすかに残るよはの燈　同

719 寄筵恋　／ひがたきや我かたしきの袖の露おなじみ山の苔のむしろに　前内府

720　またずとも打はらひてやさ筵にこぬ夜つもれる塵を忘れん　同

（了）

【付記】資料の閲覧・翻刻を御許可戴きました陽明文庫長名和修氏に、記して深謝致します。